

いの流水俳壇

友草 水月選

「当季雑詠」

虫時雨ひとりで聞くは「新世界」

岡村 嘉夫
 (評) 秋の夜一人で「新世界」の曲を聞いているのである。外は虫の音もさることながら一人で静かに聞き浸っている。その様子が鮮明に詠まれ無駄なくまとめている。

「新世界より」はボヘミア(チェコ共和国)の作曲家ドヴォルザークの交響曲であり、「新世界」とは新しく発見されたアメリカ大陸という意味である。

○雨音のかむさりにけり虫の宿
 松本たかし

覚束な城の石段月の客

植田 紀子
 (評) お月見に高知城の石段を登った。月夜とはいえ薄暗く不揃いな石段に足取りも覚束なくなり、足を取られそうになる。下五の「月の客」で座りも良く情景がよく分かる。季語の月は単に月といえば秋の月を指す。雪月花の一つで古来大いに詩歌に詠まれ物語の背景を支えてきた。春は春の月、夏は夏の月、冬は冬の月を季語とする。

○名月や杉に更けたる東大寺

夏目 漱石
 愛称で語らい尽きず敬老会
 川村 博子
 (評) 「あら博ちゃんか」「松ちゃんかよ」と昔呼び合った仲。久しぶりに顔を合わせて昔話に花を咲かす懐かしい顔が揃う

敬老会である。敬老の日は日本の祝日として「多年にわたり社会に尽くしてきた老人を敬愛し長寿を祝う」日である。以前は9月15日であったが現在は9月の第3月曜日と改正されて連休となった。

○おのが名に振り仮名つけて敬老日
 長谷川双魚

色づきし柘榴は数多風遊ぶ

津田 久美
 (評) 今年は柘榴の実がたくさんだった。紅色に熟れはじめ風の中に揺れている。写生句であるが下五の「風遊ぶ」で一段と句が深くなった。

柘榴はザクロ科の落葉木で、実柘榴と実をつけない花柘榴がある。実が熟すと厚く硬い果皮が裂け、中に多数の種子がある。これを食用とするが甘酸っぱい味である。昔はよく庭に植えられていたが最近あまり柘榴の木は見かけなくなつた。

○笑み割れて柘榴すさまじ武家小路
 新井佳津子

二句抄

一片の花びら髪に秋ざくら
 かさかさと桜紅葉の散りいそぐ
 一品のひとりの晩酌虫時雨
 赤い羽根平穏な暮し願いつつ
 千枚田結の絆の稲を刈る
 断捨離の手紙に過去が消えし秋
 鳥渡る視界の果にある故郷
 こんなにも近く大きき今日の月
 俳句には俳句の香り銀木犀
 川柳も大根も大根の味がする
 急げ癡年ごとに増せり秋暑し
 どこにでも座りたくなる秋日和
 ポロポロの猛暑にも耐ゆ広辞苑
 生け垣の見え隠れしてゼラニウム
 ぼっかりと白雲一つ秋を刈る
 浴槽に独りの冥利柚子浮かす

出不精となりてテレビの初紅葉
 八千草や日課の団地ひとめぐり
 さねかつぎ剥きつつ明日は子
 無花果の甘きとろける朝な夕な
 秋空へ青む双葉のチンゲン菜
 読みさしの句集にはさむ虫の声

名句鑑賞
 芋の露連山影を正しうす
 飯田 蛇笏

作者の眼前には芋畑が広がっている。今朝は風もなく静かでよく晴れている。空が青くて高い。芋の葉の一枚ずつに露の玉が転がり、光っている。辺りの空気も露けさに満ちている。芋畑の向こうには何軒かの農家が見え、その向こうに甲斐の山脈が連なっている。甲斐駒ヶ岳も白根山系も見える。甲州の山々は険しい。その山の巖々の一つづつがはつきりと見える。それは空気が澄んでいるからだろう。日ごろは見慣れている山々だが、今朝はことさらに折目正しく見える。

近景に芋の葉に置く露。そして遠景に連山と絵で描く遠近法と構成のはっきりした句である。しかし、その構成がわざとらしくなく自然なのは、このような環境に父祖代々住み、作者自身も子どもときから育つた地だからで毎日毎日、四季それぞれの姿を見慣れた景色なのである。

飯田蛇笏は山梨県出身の俳人で地元で農村で生活し故郷に住む感慨をさりげなく詠んだ人である。

次題 「当季雑詠」
 締め切り 毎月5日

投句先
 教育委員会事務局

いの町170011
 89311922

有料広告

医療法人 森木病院

院長 森木 光司

吾川郡いの町3674 TEL(088)893-0014

- 内科
- 外科
- 小児科
- 循環器内科
- 消化器内科
- リハビリテーション科
- 人工透析